

カンギレムの規範概念としてのハビトゥス

——戦後フランス知識界におけるカンギレム - ブルデュー関係の意味にふれつつ——

東洋大学 櫻本陽一

1. 目的

本報告では、ブルデュー社会学において、もっとも著名な概念の一つであるハビトゥスについて、関係するさまざまな経験的研究の蓄積や、ハビトゥス概念の生成と理論的内容、ブルデューの他の概念や問題設定との関わり等についての議論、あるいは様々な批判をも踏まえつつ、概念の理解に新たな視点を提示する。その中心は、ハビトゥスをカンギレム的な意味での規範概念として解釈することであるが、そのためには同時にブルデューと師のジョルジュ・カンギレムの関係を再検討することが必要になる。これは両者の関係を戦後フランス知識界のコンテクストの中に位置づけることでもある。

2. 方法

ブルデューおよびカンギレムのテキストの検討とともに、カンギレム研究や 20 世紀前半のフランスそして西欧における知識人をめぐる思想状況とそれらに関わる研究を念頭に置きつつ、カンギレムとブルデューの間の親和的でありながら、一時的に交流が途絶していたという関係性、ブルデューによるカンギレムの理論的な継承とその関係性が明示化されていないといった事情を検討する。若きブルデューは、戦後フランス知識界の知的、思想的な磁場の中に置かれており、彼の行動や選択は、20 世紀の知識人の歴史的経験の一つの重要事例として読み解くことができるのであり、彼の理論もまたそのような経験の中で形成されたもの、すなわちそのような経験に対する理論的応答としても位置づけられるのである。

3. 結果

カンギレムは、生理学、医学などの歴史を対象とした研究の中で、生命の規範性や医学の実践において働いている学以前の規範性などを明るみに出している。科学や真理の歴史性についてのブルデューの見解、界（場）やハビトゥスなどの概念は、エピステモロジーの伝統の中でのカンギレムの見解や上記の業績などを前提として構築されたものであると理解するのが妥当であり、そのコンテクストの中で解釈することによって、ハビトゥス概念などに対する様々な批判の多くに答えることが可能になる。他方、カンギレムとブルデューの両義的な関係性は、若きブルデューが、「意識の哲学」と呼ばれるフッサール、メルロ＝ポンティらの現象学の潮流に引きつけられていたのに対し、カンギレムは、それに対して批判的な、アルチュセールやフーコーらが依拠する「概念の哲学」を代表する存在であったことと関わると思われる。

4. 結論

今日われわれの前にあるブルデューの業績のインパクトは、彼の学的営為が、「意識の哲学」の提起したさまざまな問題を、否定・清算するのではなく、批判的にさらには社会学的に、ただし「概念の哲学」の立場から、再構成したものであることに由来すると考えられるのである。